心學 鸚鵡問答 全

神田旅籠町壹丁目拾番地
三河屋幸三郎

ロ 9
1349

序

語曰學而不思則罔思而不學
則殆と宣へり茲にて岐阜山の
林蘖よ住るみねのぬし家 石門ぬ
學を殺みて信し 大垣の藁渡之人み
款直しう来素今支輔 仁の切を

神田旅籠町壹丁目拾番地 三河屋幸三郎

門 仁 9 1349

爲ら後數千年にして漸く道に
大原をわくる経之關かゝるを集め
記し且儒佛の義へを營みし
まねく脩身齊家の一助と成さを
其志し深くまたわもまくなるく
し言不謂心学るよくおもひ思ゆく

能学比亭かの周弥此二川を
まぬかるる人といふもの志らさ年
文化乙亥の冬
平安　湛水翁識

日朋三世敎濟

上河正揚

自序

鸚鵡能ものいへども飛鳥を離れず猩々能
ものいへども禽獣を離れずとかや人ハ道をしり
禮を行ふをもりて萬物の靈たる名をかふ
しひかれば是よりそむかれる道をも志らずして
一生を空し果んハ醉生夢死の類なるべしや
されバ人ハ志を發し固有の本心を識る

せざんバあるべかりけれ故にいにしへの賢智人々ハ
皆自明にして形に行ひ且文字も筆し玉
残り誰か是を尊信せざらん余ハこれに異なり
くつまで何よひしるすとも恥を残して自問自答
になりぬ侍りぬ是偏に家がらやまちをある
まあん為によ知人の口まね似たりえより他よ
弘むる物すら福ど若見る人あらバ余の玄行
のひとしかゝぬ罪をゆるし孫へいさゝか志
をのべて筆をとり侍るのみ

文化十癸酉のとし
陽月中旬

今新亭
氏祐題

鷄鳴問答

或人問ふ我れ心学の道話を聞信仰いたし有難き事と思ひ又此節念佛を専信し日課を多く勤め有がたかりけるに兎角も多しい問ぜ安心いたす為に猶予も生ずきや承りたし

答曰是等ハこそれはらず為さきあり様ど修行の為よりも務むへし先念佛

を唱ふるときは觀念を忘れ妄想をおこす故
清浄ならず心やすからず然るに
一聲も南無阿弥陀仏と申す人の
さとりすみたる人のかゝぬハなし
何ぞ南無阿弥陀仏ととなふるハ無念に
なりゆく蓮臺のうへに座するも遠き
ことかはりあるべからず唯なんと思ふ
問されバ世人無念にて無心といへば何事も

たゞ南無蓮臺のうへにこそのり
菩薩あまた淫聲を發すれバ我むし
ぞ乱れ親子わかり人欲さかしき六字の
名号ハ仏性の稱名ゆへ道にそむく
代事をするより低く人欲のさかしきうべ
くしくされども四弘誓願六万遍唱へても一生
涯二六時中念仏なき事あるべし
志らずは

唱ふれハ佛も我もなかりけり
南無阿弥陀佛し
けれバよく人欲を離れ雑念なく
二六時中称名ばかりになりし高僧知識
等の事ハさておき商家の者ハ賣買
の為に称名を忘れ農人ハ耕作の
ために称名を忘れまじくおもふべしが
業体によりて称名をつとめん事ハ佛

像にむかひまつる宗意を信じ出世
たすけ給へと他力を頼む者と佛前を
退けて己がたのしみの欲するにまかさ
て他力宗を忘れおのづから称名も題目とし
他力も観念も日用の行状と二つになりて
一に成る事なくバ出家ハ俗人の名聞に
たとひ出家の業の真似するゆへ佛法と世
用とも二つになる二つになれバその行ひも

退轉いたす悪き事と思へり人〻学ひて
先生の教により一度固有の本心を
發明されてあしき事ハあしきと性よ
覚くうそハ大悪の根となり善きさるを
よ分と性よ覚へ誠ハ善の基として進み
體用一致なるゆへに親へハ孝を盡さんと
なり主人へハ忠をつくさんと思ひ兄弟むつまじ
しく夫婦ハ別を正しく和をとゝのへ

朋友ハ約のたがハぬやうに信切をつくし
下人ハ憐を加へ我子のことくなかさ
ぬやうにいたし家業にも財のすたる事
をいとひ賣先買先へ対し商ひの不實を
いたされぬゆへ百両の利金あるとても
毛頭の不實を甚しくして五倍の交りもさ
きり商ハ酒やせんするをのみ学んで其
時〻にたしなみひをの徳ハ身となりてかこれ

なりにおんびんにしこれを勤むるとぞ
是もたゞされもそのげに楽しみもまさ
平中にまん
問云其趣をうけたまはりつまりても安心になるやうなれ
ども少しは儒を学ぶがよきに益あり
やいかん
答なれど安心を窮むるは不ちからなりとも
有すじさるは俗家にして念仏一遍に

よりては偏にあらし儒者は不偏不倚にて
て大道なり
問偏と不偏との決めきゝたし
答主親夫念仏をこのみひたすら
念仏を信じ二六時中にまで
多くの日課を勤めんとする時も家業の
妨といふものは又忠孝のはかり人もおそく
になるゆへ主親夫の機嫌あしくなる

却て和合をやぶり家業にも疎くなりゆき
後々は大切なれ共倫理すてゝ出家を遂げ
たき望しもなんぞこれらは世間とお
世間との差別をもしらず法をも俗家に
しく出家の真似するによりて流れの弊
となり甚しきに至りては主親夫をする
招きも流行せし〆主親夫をもはなれ
者もあるよりも御勘当もあらんされば罪人

ともいふべし夫かゝる事いふ共それも一体
和尚乃手に
佛には何もなりかたくまりていらぬもの
いかゝにけらぬ人々にはあけても
はきて人をして恒の産なき時は恒の
心なしと承り恐るべき事や極儒
なれ不偏不倚にて大なる中は中々にも言句
なりかねいかるにあれとも一

二をあげていはゞ先(まづ)主親夫佛をほん
るハ念佛申ても題目ニても何ニてもと
其宗旨(しうし)ニ志てうひ主親夫ニけんによ、かまニ
やうに隨分(ずいぶん)大切(さいせつ)に勤(つと)むへしこれ又孝(かう)ニ
一端なり又孝經(かうきやう)ニのすゝずく孝を德(とく)乃
本なく人ニ行(おこな)ひ孝より大なるをなく
貴(たつと)きもいやしきも身體(しんたい)髮(ちう)膚(ふ)おくとるひ
やかしほとあれを父母(ふぼ)ニ遺體(いたい)ニ疵(きず)付げ

きづゝけざるやう上ニ居(ゐ)て驕(おご)らず下として
乱(みだ)れず醜(たぐひ)にありてあらそはず儉(けん)をはぶくま
やうにし用を節(せつ)して至孝(しかう)の身(て)と成ハ
たるくとも何やうなるかなしみつるとも何ゝじ
富貴(ふうき)の身ニなれ汝上ゟ下様まで万民(ばんみん)を
安(やす)んじめひ口(くち)をひらきまず口(くち)ニあやまち
なく行(おこな)ひ天下にみちぬるとも恨(うら)みを得(う)
惡(おく)を奉(たてまつ)るべき者となるへんいやしき者ハ

家内和合して天乃道を用ひ地乃利よ
り身を謹し恐多けれども
上様より下々子孫まで志ら川よこゝか
身を修むるを以て本とし親子はらふ
まつるみちは吾ががらくおごそかに敬くと
とゝのし平生孝弟を尽しなぞ終にあるを
神明に通じ四海をそゝし東西南北
随気をなさん閨門のうちにも禮をそ立

治国平天下の理ものことも孝道の外にハ
出じと我身を謹子をさとしきるすべし
やをしへをあぎらて家業勤むべしと申す
なるらん
問答佛一偏よりてハ僧家の勤なり
かく紐訳はきこえたりさりとても儒道を起
世れるすぎかりみて未来のことをきかば
儒道にても今の世の時よりあらはし一身

往生をとぐべきいはれあるや
答よく定て弁へらるべし佛道のとく
極楽往生する事も今世にて間断
なく念佛を申して修行をいたさざれハ念
佛宗にして往生覚束なし念佛宗門ハ
なれど念佛となへても佛になるといふ事を
聞ず又念佛を唱へされバ不忠不孝にて
も成佛すると佛経も亦承りし次第

願ち宗にても諸の雑行をすてゝ念佛
をなし一向に弥陀をたのみ家を忘れ
佛に向かはぬを上王法国法の備の常乃を
ともれとありて極の大行を今世にて勤め
給ぞなし次元て佛法を備れ交りを断
三衣一鉢乃境界にて志す禅宗なども
樹下石上の難行苦行をなし免今世
にてはさとりを開かんと修行するにあ

らずやまして法華宗ハ讀經題目を
他念なく勤め是又今世まで修行
其孫ばなし次いづれ八宗九宗も其々
宗旨ありて今世にてはともかく死では極楽
往生いふ次佛法さしに取りて此方に
極楽をあるけき程と聞しかど
法とあてにするは詮なき事
法とは儒道も前にかかして悪ハ怪し

多くてされ况や善を怠り多くて日々に
あるさに親に孝行主に忠義夫に貞順五倫
の交りまして本心に立かへる行ひ不ハ死
て何の行か悪きや いかなる鬼もせむべきや
朝に道を聞く夕に死すも可なり又
生を知らずしてなんぞ死をしらんとも
仰せられ佛法も己心の弥陀唯心の浄
土或ハ即心即佛とも説あり又一体

和尚のおしも
死をもせぬとどこへもゆかぬ事を得る
きけれハすゝ那そのといふめざ
若鬼ありてそのれ悟き奴か那渋める
まくあ倫の名をよく勤めし也地獄へ
落るゝをしとすゞきや是まて忠臣孝子
貞女の地獄へ落しと云ふることをきゝよくよく
考へしらるべし関東まて道二百の名話

をきく深く信心せし若き女三病し
いろりて
心学のをしへの杖をたよりけれ
ごころへ聖のかしこさよ
とあるよし聞およびて猶先覚の師
石田手島両先生の言のをしへてより
て諸人の功得しるまで聞およびて
いくばくも書得んとする才みぢく

筆(ふで)をはくしてそらし作りぬ大先生
がくれ著述(ちよじゆつ)しあひつる文(ふみ)どもをよんで
ちうはひし且有がたき　御治世(ちせい)
御仁政(じんせい)の　御代(みよ)なれば忠孝(ちうかう)を尽(つく)す者を
照らす法の吟味(ぎんみ)ありて法の誉(ほまれ)もあるすなれど
即今(そくこん)極楽(ごくらく)なりけりや右のごとく不忠不孝(ふちうふかう)
の者は来世(らいせ)をまたず即今(そくこん)に咎(とがめ)もうくべき
なりおそるべし謹(つゝし)むべし白隠和尚の

寶(たから)ばくしを急ぎする讃(さん)に
君(きみ)に忠(ちう)親(おや)に孝(かう)ある人しあらば
みの笠(かさ)も尚は槌(つち)も袋(ふくろ)と
はらばひさする人にて忠孝を勤(き)む
仕事とつとめくり又流れし草(ぐさ)にたる大(たい)じ
銭思(おも)ひあん人の宝をきんにかへらんと
みかいを宝(たか)ばしてはたらき捨(すつ)べきなり
此月やり人のこゝろにおしんあるきいて爺

いあらましにてこそ一期をすぐめるちかゝり
火のごとにかゝる人もあらしとや以ぬ身終さす
ぬんとすれも恥をもかへり見ず頼をもすてゝ
乃がれさるぞかし命ハ人をまつ物にハ無
常なる事ハ火のもゆるよりも速よ
のがれがたきものを老たる親は弱
るきをみ君は恩人の情捨がたしとて捨さ
らんやといつまでも重病にかゝりて俄よ

親へ孝君へ忠朋友乃信いつまでもつくさんと思
ひても力たらざれば後悔先にたゝ
ずといふに若しみ終るべきなき生かぎりしき
よあしく候やゝもすれば幸に延命せし事を
よろこびされまで知らざりしるハ是非か
し即今思ひなく人学にすゝみなんと
老命して生死の疑ひをそらし安心と
なし暫時なりとも忠孝の為を勤めて

死してハ有難き事にあらずや
問ていはく偏に道理に従ひ家業の障
りなきやうに佛名を信じ念佛申すハ
いかゞあるべしや
答尤なる問なりいかにも倫にはかなふ
なく家業に精を入給ふに宗旨に随ひ
める事ハ随分よかるべし去ながらたとへ紙
幾くもあるべしさりとて金銀の勘定あるも

この事人算法をよく知人をたのみて勘定
をいたしもらひたれバそれでよしと心得て
その通り帳合を済し置しに外の人来
て見つるに勘定ハ大に違ひありといふ
時相互の算法を考へてみるにゆゑん甚よ
よりて定めがたし又算法にくはしき人を
何れよりも違ひあるといふとも勘定
の合ざる所は自知するゆへ毫厘の違ひ

なし是ハ本心を發明せし人ならでハ
業法をしらぬ人ハ本心をしらで生死をまぬ
じ来世いかんと思ひまよふ人ハたゞ右
業法をしらざる者ハ禅宗の説法をきゝても
禅宗にもなられず思ひ念佛行者に勧め
を聞てハ是もよからんと思ひ又ある時ハ羅
乞坊主の悪人なりともすゝめ一念往生するなど
と渡世なれバ法談するを聞ても有がたく

かり又其のぬしとハ陰氣となりて胡乱
たく偏りあるいハさがれさいひ出て富貴に
浮てハ驕りのみ日々に増長して終に
倹をつまやうたし禮をぬしむべき事も
うしん又貧しきに苦しめる人をそしれ
惠をほどこし候ずるもせ親先祖の
祥月年回忌大切なる事なりハ却てなし
しく思ひ己がぬし茶の湯等にて客をまね

なけれバ大切なる物にてあれ悋帝をよしとし次
ニ分不信なる器物をもてあそぶ物好をよしとし酒色
におぼれ名聞をのみ好む者に堪忍すべきを
よし次ニ我慢甚しくなりて人をとりなさず
に至る類ひ多かるべし又左もなければ金
銀をたくはふるを第一と心ね集れバ少しもつかひため
たくなるは俗にいふ分限者たるべけれど
むさぼるとぞいふべく吝嗇のみにて用ひ

るゝ事ハそれもそれ女房もはなはだしく
衣服櫛笄の物好其分限よりおごりの増
長するたぐひハ是も吝嗇になるの又嫉
妬の角をふりたて若きみとめくありさまを
ミて此ハ鬼にも夫にもさらに殺すよ
ひとるべくんばさもあれでおそろしき角を
ハ胸中におさまりて念佛やむじく地獄
へおちんとするを夫ハそれとおなれるものいれ

いよ〳〵酒色さんまいになりゆくあはれなけ
かゝる事なれバや又天命にて困窮と
なりてハ身もともに苦しむのミにて折〳〵ハ
夫婦の中に修羅をもやし必定作なり
ほけ等はりまりし浅ましきあり様も
あり誠よるすき境界とも之しこれ等に
足る事を知らざるがゆへ貧しくても
楽しみ其中にある事を知らざれバ也

扨貧富ともに他へ對して争論をなし
此事なかりハ是でさへ添ぬと云事工みを
しく　御上之御賢労をかけまゐらすた
くり或ハ神佛へ奉るべき金銀をおしむ
かとこれぞ又私の欲心にて神佛のとがめに
多く散財するハ来世のためとおもひ或
ハ忽ち身上よかりけり又ハ淫欲遊蕩と心得捨両
を百文ほどもしてとる様なり

宴用いたし散財をいたす事外より是
をこれぞいやしき態なりいかで神佛
非禮を受の事をや喜ぶべし
んやたゞ誠の道にかなふひなど
いのりてこそ神やちかし舞
佛なども亦寸善のごとくなりん哉るまじく
禮によりて神拜するも雜行とん候禮
によりて魚鳥を料理するも穀にす殺生

同様に心得てむかひを恐るゝ又私のことあり
登科帽のさゞひハ家をも殺すともされん
殺生をもすれバあるハ書物にかゝわれ詩歌
文章技藝ホしながらも延壽ひハ
いづれたしバ何ほどでもよき利潤あると
きゝてハ親の讓りの商賣もかへてなり
病氣によりてハ家りよる療治をも用ひ
ず災難にあひてハ身をほろぼしむべき

なるにぞろくはふく奇怪なることを信用
し公よりゆるしなき事をしては怪魔
をれ楽しみも身ぐるみ怱々よりあるべき事
なりける禍福をとんと迷はする何ごとく
かぎりなに彌あらじ見ゆる道を知らず
がたり天子中道をも發明あれど
洒掃應對をはじめ忠孝の大なるを忘れて
わかにすゝむ人多なり見までの過ちあらむ

ほよ悟る事なかれよのそしりをあふぎ造次
ふも顛沛ぶも去ることなんば現世未来
何事かありがたきかくかるがん一貫の至妙ある大
あるはいへる天に指ぎ伸るごとく
其ぶかきの責の身れ求めかたべしきまくべき
いつれとも藤沢先生の寛恩よりも一旦
恍然としてかくれたるをも學るに知も
其流ありて新中述おとはいへども

ハまく鸚鵡のよくものいふにひとし
かなしむへし

追加

武人のいふ鸚鵡問答をこれを抄して
私のなき所を本として勤る事終一生
生死も亦一致とこゝろえへきとくていそ
死しては寂滅して善事見えてつきぬ
やゝなるものかたかし今日を勤むるうへと
忠孝の道行をうけて寂滅しくは其僥

なし出離もなし一致なくしてハ生死
一致といふ理なきいはん
善悪脩為する時ハ其悪臨即天理乃
まさしきなり経書ハ勿論先覚の残
せる文字をも拝見して忠孝の勤める所
よくよく行き主且も行くの理を窮
め今日を大事にと務めなバ是又天理
にあてつる理なり有を以て無にかへし無を

かへし有にかへすものなくんバ何ぞ生死のわかれなく
ものづきや故に死生一理なる所自知せんと
ならバ先何の聞何のつとめもなく黙して工夫
せらるべしあくこたびハ其所にかへらん
毫も言句の沙汰にてもあらし次

跋

濃陽坡山下伯亨子丹羽氏の
編ミし鶺鴒問答ハいふかしくを
草案ハ今其門を糺して儒仏乃
及ばぬ編し二行して一行なしく
二なるよしを除せるに微意ある奈

さて謡曲といふもの名人の志い
似をすましは此書に抽志れ不
人乃志似あるを退讓して於
いるなる人しれも此志似より
志らく危ぶめるする世於ならはせ
於れを小児にトゝとかゝとも

人能真似して覚え書にて
学のみにて術を乃かるにて
よきを出すに物ならん此書は
京こ乃んをを乃給ふ人何らは
家師乃導けるに所ありかなひ
後覚能よく書より楽とあり

ときん文化戌のとしむつき月
金龍白馬山法庵にて人久世
友輔志るす

余嘗轉客于岐阜數詣丹羽君之家一日見案上有此篇因請閲之
余乃言曰此是修身齊家之要論也宜公于世何藏匱之為君曰初吾草此篇也非敢示他人欲諭子弟及親戚之有志者也故其言也近其語也俚豈以貽大方之笑乎

余曰不然懐寶迷人非仁也此篇
一出能使人子孝人臣忠其有功
於名教豈淺淺乎因與一二同志
強之再三遂壽于梓云
文化丙子冬十月望兒島祺識

神田旅籠町壹丁目拾番地
三河屋幸三郎

文化十四年丁丑夏五月
岐阜逢原舍藏

京
御幸町通押小路下町
橋屋儀兵衛

江戸
日本橋通三町目
須原屋平助

大阪
心斎橋通北久太郎町
加賀屋善藏

弘所書肆

神田旅籠町壹丁目拾番地
三河屋幸三郎